

丈人力のススメ

「人生九〇年時代」をこう生きる

堀内正範著

『丈人のススメ 日本型高齢社会 「平和団塊」が国

難を救う』（武田ランダムハウスジャパン刊・二

〇一〇年刊）

堀内 正範 著

元『知恵蔵』編集長

◎目次

第一章 世相 「現役人生六五年」をすこし終えて

第二章 家族 「マイホーム・パパとママ」の憂鬱

第三章 モノ・職場 途上国産の中級品に囲まれて

第四章 和風回帰 四季と特性が息づく地域に

第五章 高齢期・居場所 「エイジング・イン・プレイス」

第六章 高齢者 ひとりの住民・国際人として

第七章 新時代 「人生九〇年時代」をこう生きる

「丈人力」は丈人層が保持する生活力、生命力。大丈夫！の気概。人生の目標を深化・発展させる力。

「平和団塊」は平和の証としての「日本高齢社会」形成の中心になる大戦後（一九四六～五〇年）生まれの一〇〇〇万人の若き高齢者層。戦後ツ子。

第一章 世相

「現役人生六五年」をすくし終えて

「好事は門を出ず、悪事は千里を行く」

* 強い荒廃園が弱い善玉園を食う

いまやちつとも希れではない「七十古希」をつつがなくすぎて「喜寿」を迎えたのに、Tさんは喜べない。

喜べない理由はふたつ。これはそのひとつ。

少年の日に自分が蒙った戦争の惨禍や戦後の混乱を、繰り返してほしくない不幸な体験として若い人に伝えようとしてきた行為が、無力であり無益であると思うようになったから。

若者の言はワル乗りを越えていまや「非を飾る」域にあると、Tさんはいう。

「非を飾る」とはどういうものをいうのですか。

「なまぬるい幸せなんか押しつけないでほしい。不幸な

体験だっけてみたい」

「戦場に出るなんて実感は人生の極みじゃないか」

「善意なんて何も生まないよ。悪意が行動のエネルギー源なんだ」

「毎日遊んでいくせして、うるさいじいさんばあさんはいらぬい」

四つの若者のワル乗りのことばを引いて、Tさんはいう。一回きりの人生だから不幸な体験をしてみたいという若者に幸せであることを願うことも、戦争を避けて平和であることも、善意から話すことも、そして先人として何かを伝えることすらできない。

若者の知は先回りして善意からの「諫をふせぐ」域にある。人間が隠し持ついくつもの本性が露わになって、前の時代の意思を閉ざして、時代は移るものなのか。

Tさんの目の前のテレビ画面を、ある日の昼のニュースが流れる。二〇一三年一〇月*日。

・南海トラフ巨大地震 ・銀行暴力団融資 ・後見人

財産詐取 ・有名ホテル食材偽装 ・商品回収 ・送り
付け商品 ・公衆トイレ損壊 ・赤ちゃん放置 ・殺人
死体遺棄 ・。これがすべて。

こんなニュースなら見なくていい、とわたしたちなら
そうできるが、若者たちは避けるわけにいかない。

「好事は門を出ず、悪事は千里を行く」という世相。
それを示すのが「荒廃菌」をもったことば。

夕刊紙や週刊雑誌の類からTさんが拾ったページから
溢れるほど数あるものの中から、ここでは五〜六行分だ
け、「荒廃菌」見出し語を並べてみよう。

狂気 抗争 挑発 怒号 罵声 悲惨 惨劇 醜悪
墮落 嫌悪 悪意 破壊 地獄 逆襲 不法 非道
欺瞞 汚辱 凄絶 悪徳 横領 餓鬼 殺人鬼 修羅
場 非常識 犬畜生 羊頭狗肉 魍魎魍魎 暴くぶ
つ壊す 騙す 淫ら 潰し 酷い 大嫌い スッパ拔
き いじめ ハレンチ アホ バカ クビ ウソ
ワ
ースト ハルマゲドン・・・。

巷の関心が「シラジラしい善意よりドスグロい悪意に
ある」というので、雑誌記者たちは悪意、悲惨、狂気に
満ちたニュースを、鬼神にでも魅入られたように競って
追いかけている。日夜、話題は途切れない。

売れるが勝ちの週刊誌だから、毎号毎号、悪逆非道な
人物を探し出しては暴きつづけてきた。強い「流行性荒
廃菌」に対しては、より強い免疫抗体を体内に形成する
ためである。「負の公益」だとしても、長いあいだ善意
を信じて暮らしてきた高齢者のみなさんにはもはや理解
できにくい悪意の領域にある。

若者たちの胸のなかを、弱い「善玉菌」を食べながら
右のような「荒廃菌」がうようよ泳いでいるのである。

「歴史悲劇」再演のプロローグ

*衣装を替えて三文役者が登場する

いまやちつとも希れではない「七十古希」をつつがな

くすぎて「喜寿」に達したのに、Tさんは喜べない。

喜べない理由はふたつ。これもそのひとつ。

いま自分が、かつて両親が直面していたとよく似たシーンに立ち会っているのではないかとTさんは感じている。進み出したら引き戻せない「戦争の惨禍へのプロセス」をたどることになる気配。

歴史は学ばない者によって繰り返し、学んだ者によって繰り返す。

かつて、といっても父祖の時代に、今とよく似た世相があった。昭和のはじめのころのことである。

世界恐慌があつて、そのあと不況に。失業の嵐が吹き荒れ、閉塞感が巷の隅々にわたかまる。政党政治への絶望、国家改造（昭和維新）への青年の動き、独断で関東軍が満州事変を起こし、熱狂型の世論がささくれ立つなかで、挙国一致の軍国化と国際的孤立、リフレ金融緩和（財閥救済）。情報の統制、売れるが勝ちのマスコミ、そしてエロ・ナンセンス。

童謡（家庭）から軍歌（国家）へと少年（小国民）の意識と暮らしの振り子が、大きく振れていく。そして国家総動員へ。

そんな時期にTさんは四人の子どもの末っ子として生まれた。両親は明るい将来を約束できなかっただろうが、暗い家庭ではなかったと記憶している。子どものころは「童謡」といっしょに「軍歌」を歌い、戦争ごっこをして遊んで育った。

先の戦争の「敗戦」で得た平和の時期を六八年、つつがなくすごしてきた、次の戦争への予兆を感じるTさん。現役である六五歳以下の国民は、平和を当然のこととしてきたから何も感じていない。

衣装を替えた登場人物たちによって「歴史悲劇」の再演ということになるのではないか。

いままさに列島総不況と閉塞感、財政難、デフレ脱却の金融緩和による格差の拡大。軍国化と国際的孤立の気配。そして「歴史から学ぶ」構想力が感じられない政治

リーダー。拙速の特定秘密保護法案の成立、ペーパーからデジタルへのマスコミ情報の混乱、絶叫型の世論、大衆受けする映像（テレビ番組）、エロ・ナンセンス。

両親が直面していたとよく似たシーンに立ち会っているのではないか。いずれはだれも回避する術を持ちえなくなつて不幸な結末を負うことになるのは、何も知らない将来の子どもたち。

Tさんが「歴史から学ぶ」というのは、国際的に孤立（とくに近隣諸国）しない、国防を国防軍に頼らない、冷静な世論をつくること、そして何よりも国民に格差をつくらないことだという。

が、金輪際、わたしは関わりませんけれど。

しかし、Tさん。待ってください。

三〇〇〇万人に達した高齢者（六五歳以上）はまるで黙止されて、「アベノミクス仮想好況」からはなんの恩恵もなく、格差だけが広がっていることに気づいています。この四人にひとりの高齢者の存在は、歴史の繰り返し

ではなく、歴史上初めてのことではないですか。

この国の高齢者が保持している潜在力を發揮してつくり出している「成長＋成熟社会」は、Tさんという国際的に孤立せず、国防を国防軍に頼らず、冷静な世論をつくること、そして格差をつくらないこと。これが新次元の「歴史をつくる」ことにはなりませんか・・・。

「・・・もう遅いような気がします」と、まっ白くなり薄くなった髪を撫であげながら、Tさんは真顔になつていつて黙り込む。

「若年化・女性化・IT化」が優先

*世代間に亀裂が広がる

超大国「アメリカ一極化」と途上諸国主導の「グローバル化」によつて、きしみながら新世紀へと舞台は回つた。国連は、新世紀が「平和と非暴力」にむかうことを

願って、「文明間の対話」を課題とし、二〇〇一年を「文明間の対話年」としたのであった。

ところがそれに逆らうように、ニューヨークの「九・一一テロ事件」、そして二〇〇二年三月の「イラク戦争」を引き起こし、報復テロの恐怖が世界を覆うことになってしまっている。

そして「BRICS」（ブラジル・ロシア・インド・中国など）をはじめとする途上諸国の台頭という激しいグローバルな経済的時流。

それに覆われてしまったから、二一世紀の国際的潮流である「高齢化」は波がしらす見えなくなってしまうている。国連は一九九九年を「国際高齢者年」と定めて記念行事をおこない、新世紀での国際的課題として各国に「高齢化」対応を要請したのであった。

アジア唯一の経済先進国として、また世界最速の高齢化先行国として、この時流と潮流のふたつを課題として世紀をまたいだ日本だったが、この一〇年余の際立った

変容といえ、若年化と女性化とIT化」という時流対応のものだった。

だからパソコンとケイタイを駆使する若い娘は、いつしか「わたしが主役！」として振る舞うようになり、「世の中ますます粗悪になる」とグチりつけて何もしいヨボヨボの祖父を脇役とみるようになった。

Tさんは孫娘からも軽くあしらわれているのである。激しい時流への対応が優先するのはしかたがない。

それは身近なところでは、家庭の途上国産の日用品と企業の非正規社員の増加によって実感されている。角度を変えて言い添えれば、わが国より一歩遅れて成長期に合ったアジア途上諸国と向かい合い付き合うための「日本途上国化」なのである。

「先進国型の高齢化社会」を迎えるはずが「途上国型の若年化社会」に出くわしたのだから、日本の高齢者は二重の災難に見舞われることになった。それがもう一〇年余もつづいている。

政府が「高齢化社会」対策を講じないままに、わが国の高齢者（六五歳以上）は、三〇〇〇万人、高齢化率（人口比）で二五％に達し、四人に一人になっている。

「移譲できない」「高齢者資産」

＊どうする「家計黒字一四〇〇兆円」

そこに「もう待てない」と言い出して、いらだちに近い懸念や要請を高齢世代に示しはじめたのが、企業の生き残りのために身を挺することを余儀なくされている中年の現役世代である。退職社友には理解できないほどに、中堅社員の立場は悪化しているのである。

ことあるごとに「成果主義」を強いられる。正社員とアルバイトと派遣社員が混在して同じ職場で同じことをする。その上で実質賃金の目減り。

企業の生き残りのためとはいえ、黙々と耐えてきた中年層の人びとの胸の奥に、将来への不安がわだかまる。

同僚との間でも、同業者との間でも、親和の感性が少しずつ磨り減って働かなくなるのがわかる。

マクロ経済からの異次元の「金融緩和」という前払い政策によって企業は潤ったが、これから事業を起こして景気回復のために働くのは自分たちである。

そのうえ高齢者はなんなんだ。

現役世代がムリして負担している年金を受け取りながら、スポーツジムに通い、旅行をし、レストランで会食し、次の時代に「われ関わり知らず」として暮らしているのではないか。

高齢者が資産として動かずに留保しているという約一四〇〇兆円の「家計黒字」（両親の持つ貯蓄については、五〇歳以上の世帯が七五％までを保有しており、抱えこんだ高齢者が次の時代に関わりなく「引きこもり」の余生を送ろうとしている。

海外では時代の推移と連動しながら人も動かしカネも動く。株式や出資金にまわるものが、日本では現金・預

金（半分を越える）のまま動いていないのである。

功労者としての敬意とない混ぜになって、胸のうちに右往左往していたらだちは、次第にふたつの方向に集約されて納得されることになった。

まずは懸念。そのために起きている「資産の塩づけ」についてである。

高齢者としては、この先どこまで判らない長い老後の不安解消のために、底まで判った資産を抱えこんで離さない。それが経済活動の効率を悪くし、企業活動の手足をしばっているというのが「高齢者資産塩づけ論」。

高齢者の不安解消のために、いま国の骨格を支えて働いている現役社員の不安を放っておいていいのか。

となる。ただし国の財政担当の現役官僚からすれば、安定した黒字財源としては動かないほうがいい。いずれ二〇年もすれば一過性のものとして、すべて相続とともに動いて解消されることになる。声には出さないが、それは自分たちの高齢期の安定財源となる。

本来は「安心して暮らせる高齢社会」に対する国の構想さえあれば、この一〇年の間にその形成のために出資すべきものであったが、安心できる国の構想が見えないゆえに活用する機会を失ってきた貯蓄なのである。だから「使うところに使えない資産」になってきた。それは高齢者なら理解がいくことなのである。

それより高齢者側の言い分は、企業内では若手にしごとを譲って脇役を余儀なくさせておいて、定年後には老後資金をねらうのか。現役は自分たちの力でやりぬいてくれないと困るではないか。

中年の側からはもうひとつ、使わない高齢者から使手の若年者へ資産をトランスファー（移譲）すべきではないのかという「高齢者資産」移譲の要請が力を増すことになる。

こちらは楽天の三木谷浩史会長など、新しい財界をつくる勢いの若手オーナーたちの持論である。いくら景気回復でもがいても、いっこうに進まない要

因が、高齢者層の支援の欠如にあるというもの。使わな
い、あるいは使えないのなら必要としている若手に譲っ
て資金を動かすことだ。

さきごろ「教育資金贈与」として一五〇〇万円までの
非課税措置が決まったときには「愛情口座」として、若
い母親たちからも拍手が沸いた。高齢者がため込んだ資
産を子・孫のために動かそうという官僚の側からのヒッ
ペガシ政策である。

とはいえ資産はおいそれとは動かない。世代間に亀裂
が広がる。それに高齢者だけが「引きこもり」になっ
ているわけではないのである。

みなさんのまわりにも一人ふたりと居るに違いないが、
優れたIT青年たちが技術開発の作業の中で使い捨てに
されて社会と断絶していく。若い女性もアルバイトや派
遣社員なのに荷重な実務を引き受けて体調を崩してしま
い、嵩じてはうつ病に陥り、外界との関係を遮断してい
く。どちらも繊細な感性の持ち主ほど傷ついている。

この傾向は、正社員として即戦力を期待されて入社し
たものの、適性と将来に不安をつのらせて「新入社員ニ
ート化」としても広がっているのである。

そんな不安状況に包囲されて、中年世代の人びとは、
気づかないうちに「自己チュー」（自己中心主義）に陥っ
てしまう。これ以上すすむと国の骨格である働く人びと
が骨粗鬆症に冒されてしまうほどだ。

「諸君が高齢者になればわかるが、そう簡単に移譲など
できるものではない」と、若手の「団塊の世代」あたり
からは甘えの後輩への不快感を隠さない声があがる。

中年世代に安心感を与えるためには、いまこそ高齢者
は、だれもが暮らしやすい社会をめざして、みずからが
資産ばかりか「知識・技術」を動かすことだ。若い世代
も巻き込んだ「日本型長寿社会」を達成する方向にむか
わねばならないのである。

中年社員のみなさんは、これから本稿が論じる「高齢
世代によるみんなのための社会」づくりを期待して、先

輩の果敢な挑戦を見守るのがいいと思う。得られる経済的な波及効果は将来にわたって大きいし、その成果はいずれは次世代の諸君の資産となるのだから。

「急流勇退」の引きこもり

*いさぎよい隠退の功罪

現役世代から、われわれが負担している年金を受け取りながら、次の時代に「われ関わり知らず」として「引きこもり」の暮らしをしているといわれれば、高齢者はだれにもそういう一面があることを否定できない。

しかしそれは個人というよりしくみのせいである。

かつては先輩の「いさぎよい進退」が、後輩に活動の場を残し、将来への安心感と励ましを与えてきた。

先ごろスタジオジブリの宮崎駿監督が引退したが、ああいう引退のしかたを「急流勇退」という。まだしごとができる現役のうちに、惜しまれて引退する。野球の松

井秀樹にもそういうところがみられたが、なかなかできないことなのである。

だれもが穏やかに「余生」に入れたところはもちろん、企業や組織の「高齢者リストラ」がすすめばさらに、すぐれた知識、経験そして人格をもった人びとが、会社や後輩のために定年を持たずに潔く職場を去っていったにちがいないのである。

「君子は進み難くして退き易し。小人はこれに反す」の君子がそのまま理解できた時期である。

後輩としてはだれもがそういう君子然として身を引いて「引きこもり」の人生にはいった先輩の姿を思い浮かべることができる。

しかしそれは「余生」が短かく、高齢者が少なく、熟練者にも仕事があったころのことで、いまや四人に一人という本格的な高齢者時代、そのうえ熟練を要するしごとがない状態のときには、美談でもなんでもなくなっている。しごとまみれの若手としては、しごとなしの高給

社員は早めに消えてほしいのである。これが忌々しき実情なのである。

ここでは典型的な引退事例として、六五歳をすぎし終えた三人の高齢者の三様の暮らしぶりを見ながら、課題のありようをみてみよう。

まずは恵まれた生涯が約束されて安全圏にいとみずからいうDさんの暮らしぶりからみてみよう。

「「陽来福型の高齢者」のDさん

*「隠退ウーピーズ」(豊かな高齢者層)

Dさんは、君子然といえるほどの風采ではないが、広い額に細い目でとくに明るく笑い顔が安心感を与える温和人柄の高齢者である。

超ではないが並一流の企業を定年まで二年を残して勇退してのち、男の平均寿命である八〇歳を越えて八五歳

までの残り一五年ほどの人生をあれこれ楽しんで暮らせると計算を立てた「君子的ひきこもり」の高齢者のひとりである。

自分でも幸せな「隠退ウーピーズ」(豊かな高齢者層)だと思っている。会社人間だったから地域に知り人はいないが、学友や同僚があちこちにいて、それにつかず離れずに暮らす妻と娘の家族。趣味も多く、何よりも額に汗して食材をえる「自作菜園D」の自営農が自慢である。

肝心の生活費はどうか。

公的・私的年金のほかに資産収入もあって、近居している娘や孫の支援、病気や不慮のできごと、車の買い換えや築二〇年を越えた住宅・設備の修繕(これがけっこう費用がかかる)、そしてふたりの葬儀費用まで、特別な出費のための「生涯準備金」(預金と国債・株式が半々)はいまのところ崩さない。それでも小遣いは月八万円以上。現状では「引きこもり」に不服も不安もない。

ありがたいことにデフレで目減りしつつづけていた資産

が、金融緩和・株高で老後の安定した豊かな暮らしを支えるという四〇〇万円に補充をえた。住宅ローンがな
く菜園にできる土地を残してくれた岳父に感謝している。

正直に言えば、健康に不安はないのだが、こと
し一六歳で亡くなった木村次郎右衛門さんが、郵便局
員をつとめて退職後は九〇歳まで農業をして長寿であつ
たことに学んで、「農作業ができる間は」と考えることで
安心している。

平均余命で見て、七〇歳なら男性は一五・一なので八
五歳、女性は一九・五なので八九歳だが、健康に留意し
ているからそれより長く、さらに男性八五歳の余命五・
九までを加えて九一歳、女性は五・八を加えて九五歳ま
では行けるかと思っている。「自分はムリかもしれない
が、同い年の妻はクリアできる」と予想している。

岳父同様に住居と敷地のほかは資産を残すつもりはな
いから、多彩な趣味を楽しみ、旅行でも観劇でも食事で
も会合でも、学友や同僚から声がかかって必要な時には

積極的に参加し、浪費もする。

友人たちの会で語られるだれその認知症や医療や介
護の話を耳にすると、ドック検査による健康状態も良好
で、何の有訴もない自分が、めぐまれた楽天的ウーピー
ズのひとりに思える。

時代が下降し、頽廃期へむかう時期にあると感じてい
るので、Dさんはしごとには「われ関わり知らず」と固
く決めて、後輩が知恵を借りにやつてくるのにも、「いま
さら会社のために、わたしまで引き出すのはやめてくれ
よ」と、冗談としてはなくいつて態度を崩さない。

それでも七〇歳の古希を迎えて、後輩からしごとに関
する声がかからなくなり、みずからも気力・体力の衰え
を実感する日はさみしい。知人の訃報に接すると、テレ
ビ批評もせず新聞も読まず、終日、気分の晴れないこと
もある。「君子的引きこもり」の独居をゆうゆうと愉しむ
境地にはなお遠いことは感じている。

「ウーピーズ」と自得したところで、父祖伝来の土地を

切り売りして億単位の資産を得て安全圏にいる都市近郊の「金満農家」と違う。「自営農家」にすぎないから、経済のデフレからの脱却によって頼みの資産が少しでも確保されるのは個人的に歓迎である。

日々を静かにしていねいに過ごすDさんのような「陽来復型の高齢者」が沈黙している間に、高齢者の資産を「塩づけ」とする世論を背景にして、御用学者と現役官僚はさまざまな手法で余裕のある高齢者の資産を切り崩す政策を取り始めた。

財政官僚のそんなやり口には、Dさんも「後人としてあるまじき行為！」として不満を隠さない。

といって、「引きこもり」に徹した生き方を変えるつもりはなく、思いのほか早々とやってきた「高齢期じり貧人生」とつきあう覚悟だけは固めている。

申しづらいが、このままの状況で推移するとすれば、安全圏と考えているDさんほどの人ですら、生涯を安穩に過ごしかれるかどうかはむずかしい。ましてや「現役

六五年」を過ごし終えて、いま平均平凡をよしとして過ごす高齢者が、平安であるとはいえない。

「先憂後楽型の高齢者」のIさん

*ほどほどの赤字人生が男の美学

Iさんは、父親の後を継いで中小企業の経営者になった「生涯現役の跡継ぎ二世」の高齢者である。

二〇年ほど前、平成になってすぐに四〇歳代なかばに二代目経営者となった。だから六五歳を過ぎたが定年という区切りはない。創業者の父親が元氣だった高度成長・繁栄期といわれた時期もやたら忙しかっただけで、とりわけ家が豊かになったわけではなかった。周囲のひとびとが世間並みに暮らせるようにと、父親がひたすら心を砕いているのを見てきた。

父親は経営者として教育（学歴）がなかったことを生涯の負い目と感じていたから、

「おまえは大学を出にやいかん」と口癖にいつて、家業の手伝いを強はず、子どもが高等教育を受けて意気揚々とした人生を送ることに期待しつづけた。晩年には「親孝行進学」で大学を出た息子が期待していた人生を歩んでいないことを知ることとなったが。

わが国の戦後復興期から高度成長期（一九五五〜七四年）のころに設立された中小企業では、Iさんのような跡継ぎ二世は決して少なくないだろう。技術を尽くして質の良い日本製品をつくりあげてきた実直な父親と労苦をともにしてきた社員に囲まれて育ち、いまは二代目として跡目を継いでいる。同じような経緯をもつ機械製造系列の子会社（親会社ではない。いま海外進出をして元氣）から下請け品を求められれば、資金繰りをして設備投資を重ねても求められる製品を納めてきた。

そして迎えた世紀末の「列島総不況」。

その後、Iさんも人を減らしながら景気回復を待ちつづけてきたが、下請けに徹して生涯現役で亡くなった父

親には申し訳ないが、ここ五年ほどのきびしい経緯からみて、もはや再生の手立てはないところに来た。次第に負担の重くなる借入金返済する余力が出ない。

「生涯現役の跡継ぎ二世」のIさんが引き継いだ父親のもうひとつの遺産である草野球リーグ名門チームも、若者が減って紅白戦が成り立たなくなった。

「中小企業退職金共済」で定年は設けているが、父親のころから技術と意欲があつてしごとができるうちは文字通りの終身雇用である。だから効率のいいしごとが減り収入が減っても従業員には減収にならないよう給与は払いつづけてきた。がそれにも限度がある。

このまま推移しては、高齢になつて先が読めなくとも「われ関わり知らず」などといつてはられない。というより引くことなどできない。

「男というものは、きちんと仕事をすれば、どこで何をしても、ほどほどの赤字ぐらしをするものだ」というのが、父親がよく口にし、自分も受け継いだIさんの

負け惜しみ半分の人生哲学である。周辺の人より先に豊かになるというのが父親の「先憂後楽」の考え方である。それで満足して亡くなった。

製造ノウハウを持つ親会社が生き残るために、まずは主要なパーツ以外は中国や東南アジアの途上国に生産拠点をシフトした。ついには製品化までとなれば、子会社はともかく孫請けは回復どころではない。「ほどほどの赤字人生」などともいつていられない。朝起きるたびに、その日が刻々と近づいてくるのを感じている。

独自でのしごとにメドがたたず、下がりがつづけた担保資産との見合いの末に、いずれ不良債権の処理対象として銀行から見放され、こちらの意欲が萎えるまでは、会社と社員と家族を守るつもり。

さしたるぜいたくもせずに、父と同じ「先憂後楽」の心意気を貫いて、「二世の星」（父の口ぐせ）たちを見上げながら、自分だけは沈没船の船長よろしく地獄へでもどこへでもゆくつもり。

父の時代にゼロに始まって二代目の自分の時代にゼロに終わる人生を、Iさんは納得している。それはそれで男子のみごとな終始のつけ方ともいえる。

が、惜しいかな、「高齢社会」を多彩にし豊かにする「高齢化用品」のユーザーであり、メーカーであるという点でもまたゼロの人なのである。みずからのためにすることもあつていいのである。

「Iさんの会社が蓄積してきたような技術力は、独自の製品には活かせないのですか」

「孫請けのところではむずかしいですね」

返答は明快である。高齢者の暮らしを豊かにする日用品のために活かして、自力製品で活路を開くことができないものだろうか。

Iさんたちのように、良質な製品の製造に努めて下請けの現場で工夫して自得した製品化の完璧主義を崩すことなく、熟練技術を必要とする「優良日用品」製造の時期がきているように推察される。

高齢技術者の保持している技術と経験と意欲は高齢化製品の製造に活かされねばならない。それなくして、内需で湧くような経済活力は生まれにくいからである。

「戦々兢兢型の高齢者」のYさん

*「貯蓄ゼロの日」へのカウント・ダウン

給与所得者は、ことし四月からの「改正高年齢者雇用安定法」の施行により、定年が六五歳まで延びた。

とはいえ退職を前にして業務替えになったり、収入減を余儀なくされながら「待ちの日々」を送ることになる。就業者としての充実した日々には遠い。

なんとか定年まで勤めて、行く末が不安な程度の退職金と年金を合わせ計算しながら、どう暮らすかに思い悩むことになる。現役高齢社員の過ごし方については別項で論じることにして。

改正安定法にかかわらずに昨年、定年退職したYさんは、

技術畠ひとすじに四〇年を会社勤めですごした。退職後も前職をいかして仕事があればと願っているが、このリストラ時代。「ハローワーク」は覗いてみたが、特殊技術すぎて該当するしごとはなく、求職の登録をせず、資料一式だけを入手して帰った。失業率には計算されない潜在的求職者のひとりである。だから失業率5%以下などという数字を信じてはいない。

Yさんは、少ない退職金から、住民税（これが大きい）を支払って急に重量感を失った貯蓄から、さっそく定期的収入が減った分への「貯蓄取り崩し」がはじまった。ほとんど病気がらしい病気はせず健康だったが、給料天引きの健康保険料の負担を感じなかったが、年金からの健康保険料の支払いは大きい。

先行きの不安は身边に渦を巻いている。財政負担を軽減するための「公的年金」のカット。次第に現実味を帯びてきた「消費税の大幅増税」。長年つれそってきた妻の持病と何時わが身に降りかかるかしのれない「医療費」自

己負担。企業業績の不振による「企業年金」の減額。あと三年つづく住宅ローン。そしていつまでも独立できない子どもへの支援出費……。実は「ペイオフ」（預金の限度内払い戻し。一〇〇〇万円）に届かないほどの預金額だから、長生きすればいつかは必ず訪れるにちがいない。「貯蓄ゼロの日」への不安。

退職したあとYさんは、旅行や観劇、書籍・雑誌の購入、外食などを減らして「選択的支出の削減」に努めている。それでも生活用品の値上げや日常経費、医療費や税負担とくに際立つ健康保険料など「基礎的支出」が確実に増えることから、将来の家計の先行きはとめどなくきびしい。

「貯蓄ゼロの日」へのカウント・ダウンは始まっているのだ。「薄氷を履む」ような日々がこれから長く続くことになる。Yさんは多数派である「戦々兢兢な型の高齢者」のひとり。

「一私企業人でしたし、さして優れたことはしてこなか

ったかもしれないけれど、必死で働いてきたつもり自分までが、高齢者になって見捨てられることはないでしょう」とYさんは国の施策を楽観的に信じている。

長生きすればいつかまた「スイトン時代」がやってくるかもしれないが、それでも平和なら生きられるだろうとYさんは思っている。

通信機器の技術労働者であり、つい最近まで会社の主力製品のひとつになっていた機器の発案製作者。といってYさんは、一社員が発明対価（成果主義）を求めるのは違うと思ってきた。

「将来への希望は現場の活力にある」と技術者であった経験から確信している。

自分は細身だったのでヘルメットは似合わなかったが、NHKの人気シリーズ「プロジェクトX・挑戦者たち」で、工夫を重ねて事業に貢献した人びと、いかにもヘルメット姿が似合いそうな人びとの姿をみ、話を聞くのが楽しみだった。番組はその後、個人の技能に転じた。

番組が終了してずいぶん経つというのに、胸の奥に刻まれたように、気がつくとき、いまでも中島みゆきが歌ったテーマ曲の一節「つばめよ、地上の星はいま何処にあるのだろう」が体の中を繰り返して流れている。仲間との苦闘のあとを思いながら、溢れる涙をじつとこらえていた技術者たちの顔顔はいまも忘れられない。

「バブル・デフレ・アベノリスク」

*「経済が丘」からの託宣

「戦々兢兢」といってもYさんにはいまでも活かせる技術がある。「先憂後楽」のIさんには技術をもった信頼できる社員とチャンスが残っている。「一陽来復」のDさんには寿終の時も傍らにいてくれる愛妻がいる。

三人の例でこと足れりとはしない。老後の生活設計など立てられず、年金(国民年金は平均五万四〇〇〇円余)を頼りに先の見えない不安な日々をすごしている高齢者

が増えていることもたしかなのだ。傷んでも家の修繕なんかにとでもお金をまかせない。

そのなかには戦禍にあつて家を失い、戦場で夫を亡くし、苦勞して子どもを育てあげて、一人暮らしの大正生まれの女性も多くいるに違いない。

フツフツの人にもわかるように、将来のこの国の姿や不況から脱け出る方法を語る人がいないものか。数字には強いが人間味が感じられない政治家や経済学者や官僚の横文字好きのアナリスト。テレビ番組に常連なのは、億兆円をわがもの顔で語る人たちである。司会者も含めて、いずれ安全な「経済が丘」の上からの展望者であり、どうみても現場の痛みがわかるような人びとではない。だから将来の方策も不況脱出の方途も、痛みを感じている人びとを優先するものとはならない。

思い返せば、「バブル・不良債権」で一〇年あまりを騒ぎつづけ、次には「デフレ・スパイラル」(物価下落、所得減少、需要減退、物価下落というらせん状の悪循環)

をこね回した。

その果てについて安倍総理が「デフレ脱却」のために異次元の金融緩和をおこなって「アベノミクス」(マクロ経済からの「前払い」政策)を起こして解決を図ったのだった。

九〇年代から新世紀を通じて日本経済の退潮を実感してきたから、一般市民はその間、ずっと右下がりの暮らしを納得してきたのである。事業があつておカネが動くのではなく、おカネを動かすことで事業をつくる。

「数値に裏付けされた分析が正しかったとしても、国民を対処に立ち向かわせる人的パワーを燃え立たせる変革には結びつかないのではないですか」と、Dさんは静かに断定する。宮澤(喜一)さんとともに途方もなく財政赤字を大きくした安倍(晋三)さんの「アベノリスク」として記録されることになる。

「カネで人を動かす経済政策。これでは働く人の実態も実感もないですよ。そんな好況が長くつづくと思えませ

んね。結局は働く人が意欲を失って、将来の経済は軍需産業に向かうしかなくなりますよ。ましてや成長力ゼロと見ている高齢者の人生なんか眼中にない」とYさんは不満をあらわにする。

Iさんは「アベノミクス」の恩恵の外にいて、テレビで企業家が好況をいい、期待する街の人たちのようすをみても、「何が起きているのかよく分からない」という。

「さまざまに生じる格差のなかで、失礼に過ぎますが、実感がなるとすれば恩恵なしかったようですね」というのには、「何も期待していませんよ」と無表情でいう。

